

## 2. 併設型中高一貫カリキュラム（1-2-2-1制）の今後の課題

齊藤真子

### (1)併設型中高一貫カリキュラム（1-2-2-1制）の評価と発展的展開

本カリキュラム研究において、2003年度までに実施されたのは一部である。2005年度に6学年全体が新カリキュラムとなる。3年間の研究開発で中学から実施している「ソーシャルライフ」や「選択プロジェクト」を学習した生徒達が2004年度には高等学校に進学し併設型の特色である「融合カリキュラム」や「新教科群」に取り組むことになるので、学校・教師の視点からだけでなく生徒・保護者の視点からのカリキュラム評価を引き続き行い、終了時には1-2-2-1制による併設型中高一貫カリキュラム全体の総合的な評価をしなければならない。

「キャリア教育」の観点より1-2-2-1制による併設型中高一貫カリキュラムの運営と評価を行うとともに、アンケート調査結果や成績資料などの多角的なデータをもとに、生徒・保護者の視点に立った併設型中高一貫カリキュラムの評価と発展的展開を目指すことが今後の課題である。

### (2)新教科・科目の教科書づくり

本カリキュラム研究ではいくつかの新教科・科目が構想された。中学段階における「ソーシャルライフ」と高校段階における「新教科群」の一般化に向けての取り組みについては、教科書づくりが急務である。引き続き1-2-2-1制による併設型中高一貫カリキュラム全体の総合的な評価をしながら、中学と高校における教室での授業実践研究を基にした生徒の参加による「ソーシャルライフ」や「新教科群」の教科書（ビデオ・ワークシート）づくりに取り組むことで、改善していきたい。

### (3)「キャリア教育」のためのワークシートづくり

中学から高校にかけての発達段階をふまえたキャリア形成の在り方をふまえて、キャリアパスやインターシップを中心としたより発展的なキャリア教育を行う。そのための「ワークシート」づくりをする。そして、小中高大を見通した系統性のあるキャリア教育を行うための問題点について、整理することが課題である。

### (4)「大学との連携」による新しい中高一貫教育の可能性について

大学の求める「知」と中・高校生の学力がなぜ一貫性をもたないのか。中・高校生の学びの力の低下の背景にあるものは何か。21世紀の基礎学力とは何か。問題点は大学受験のみを動機づけとした高校における受身的な勉強の弊害にあるのではない。21世紀の学力は、中高大連携による「学びの力を育てる個性的自立のカリキュラム作り」によって育成することができる。

成熟社会における中等教育の課題は多い。高等教育への接続などの諸問題の改善のために必要なのは、新しい中高一貫教育に向けてのカリキュラムデザインの検討である。

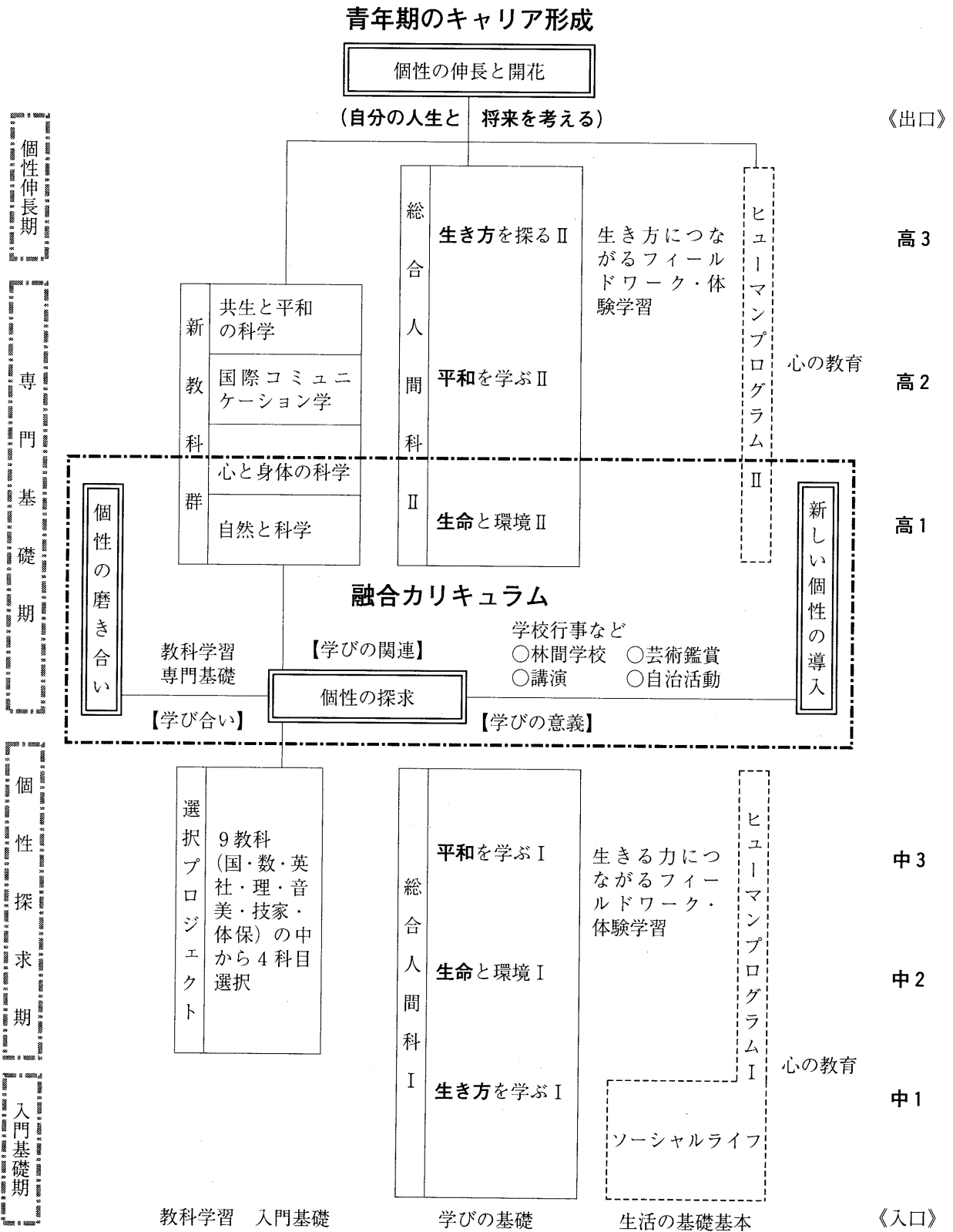
さて、併設型中高一貫カリキュラム（1-2-2-1制）の下、本校では、総合的な学習やキャリア形成を中心に、中等教育の理念と課題について実践的な研究を重ねてきた。その知的好奇心と創造的・個性的自立を育む教育実践の成果をふまえて、併設型中高一貫カリキュラム（1-2-2-1制）を発展的に展開するために、「総合大学との連携」を今後もより進めていくことになる。

大学の求める文理融合の「21世紀型教養」を育むためにも、教育発達科学研究科と「中等教育センター」の組織を通じて、同一キャンパスにある総合大学である名古屋大学の各研究科やセンターとの共同研究として、新しい中高一貫教育の研究のあり方に取り組むものである。

現在、中・高校生と保護者を対象として大学の最先端の研究内容を分かりやすく学ぶ「学びの杜」講座や「個別学習アシスト教室」などがあるが、今後大学と連携しどのように展開させていくかが課題である。

資料1

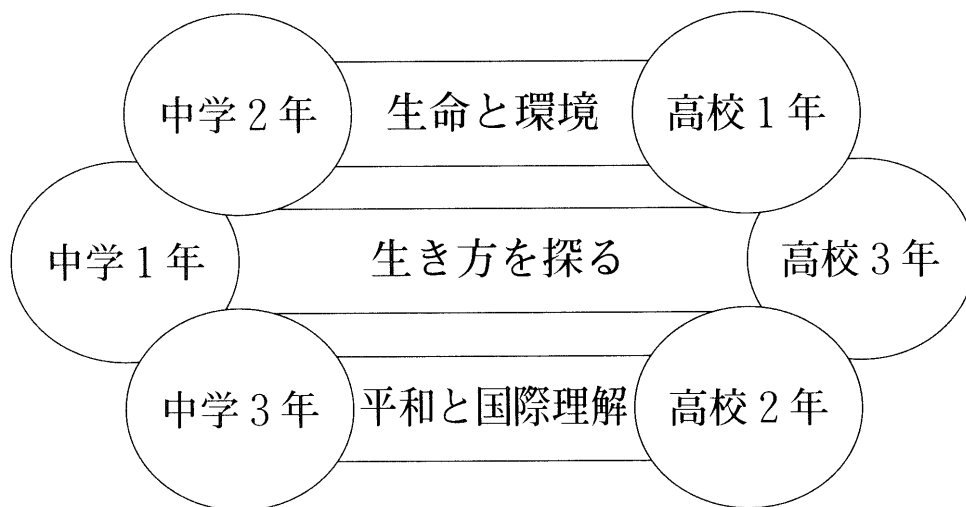
個性的自立にむけての併設型教育課程の構造



資料2

## 総合人間科

◎学年テーマ



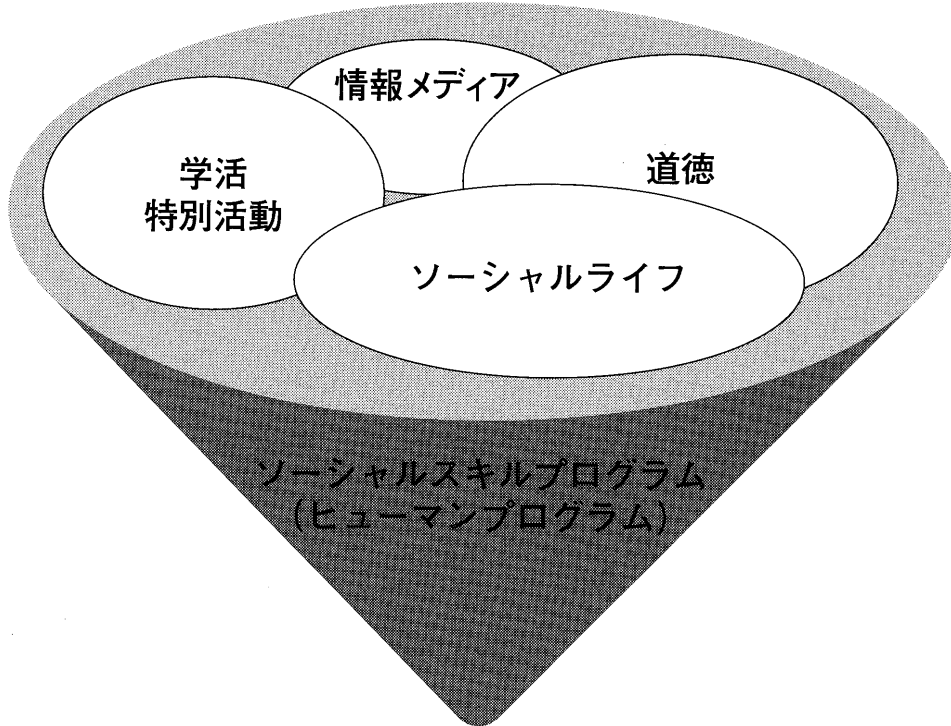
◎各学年の学習内容

中学1年	新しい学年として「人間関係」を大切にしている取り組みを展開。コミュニケーション能力、社会との積極的な関わり方を学ぶ。
中学2年	知的関心を高め、その中から問題を発見し探究し解決していく力(問題解決能力)に力点を置いての取り組みを展開する。生命と環境の身近な問題を取り上げる中で発見し展開する。
中学3年	平和学習を軸に戦争の加害の問題を広島・大久野島をフィールドとして学習する。また、国際理解とは何かをつかむため、名古屋大学の留学生との交流、インターネットでの情報発信を展開する。
高校1年	個人研究(個人学習)による展開。一人ひとりが、自分の学習したい内容を設定して一年間調査研究を行う。「命」「福祉」「環境」に関する問題まで幅広く、自分の興味関心のある問題について個人研究テーマを決めて行う。フィールドワークは、実際に訪問して実地体験したり、インタビュー(取材)を通じて研究を深めるものとする。訪問先は、研究テーマにあわせて自分で探し、事後に報告会や報告書の作成により研究成果をまとめる。
高校2年	グループ学習による展開。沖縄研究旅行を中心に授業を行う。沖縄についての事前学習や、名古屋大学教授による特別講義を経て、研究グループを組織し、研究テーマを決め学習する。沖縄についての理解を深める為に、ディベートや討論の授業を展開する。
高校3年	「生き方」の問題について個人テーマを決めて研究する。単なる「進路」の問題だけでなく「生き方」を中心にして自分の進路を自覚的に選択できるように研究を行う。スピーチと卒業論文でまとめる。

資料3

## ヒューマンプログラム

- ◎ヒューマンプログラム（ソーシャルスキルプログラム）は、特別活動、学級活動、道徳、ソーシャルライフを総括した名称とする。
- ◎ヒューマンプログラム（ソーシャルスキルプログラム）の中のソーシャルライフを「心の教育」の授業として展開する科目名とする。



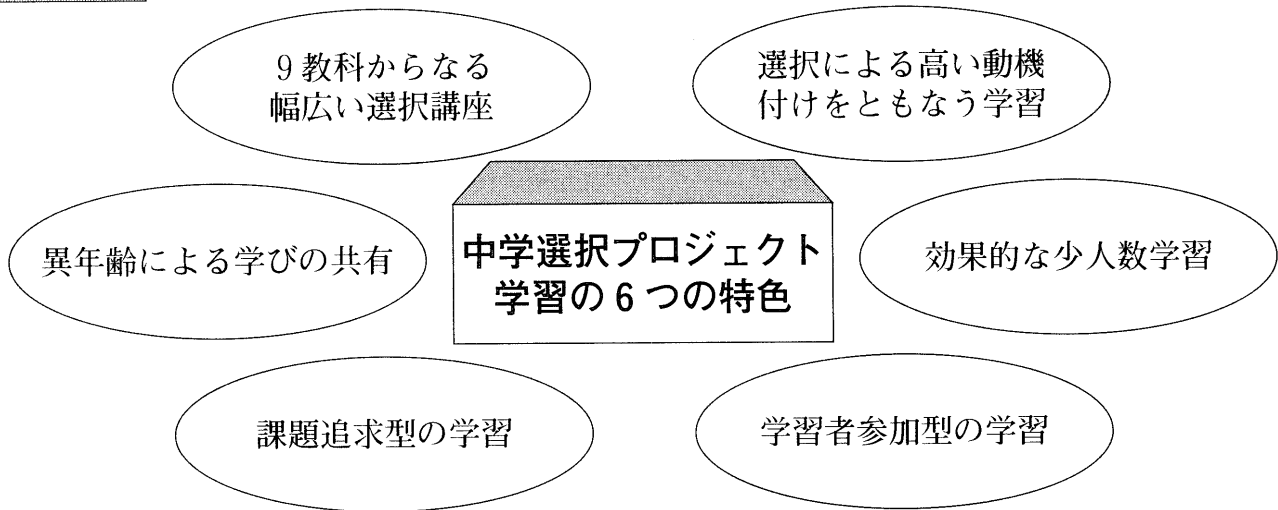
### 1) ソーシャルライフの各学年における実践計画

中学1年・高校1年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人としての関わりを重点に、生き方・考え方を取り上げ理論化、意識化する。</li> <li>○学年担任団だけではなく、「心の教育」の担当者として専門家による授業展開。</li> <li>○心理学実験や講義と議論（討論）を交互に行う。</li> </ul>
中学2年・高校2年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人間として社会（集団）の中での『気づき』を育てる。 自分の存在に対する『気づき』 他者に対する『気づき』 集団と仕手の『気づき』</li> <li>○生活の中での問題を扱う 行動の意味・場についての意識・生徒同士で「決める」プロセスを学習。</li> </ul>
中学3年・高校3年	<ul style="list-style-type: none"> <li>○批判的思考能力を育成し色々な思考力を養っていく。一つの方向からだけでなく、多面的な思考力を養う。</li> <li>○セルフカウンセリングによる授業展開。</li> </ul>

資料 4

## 中学選択プロジェクトの特色と内容

### 学習の特色



### 講座例

- ◆国語：SAMAZAMA書き方教室
- ◆数学：数検にチャレンジ！
- ◆音楽：音楽文化史
- ◆体育：附属発！未来のスポーツ
- ◆社会：裁判ウォッチング
- ◆理科：身近な植物に親しもう
- ◆美術：目指せ！デジタルアーティスト
- ◆技術：立体製図と木工
- ◆英語：Make Drama and Play Drama：English Storytelling

### 講座展開例

1. 2時間連続授業（100分）
2. 中学2年で2回（前期・後期）、中学3年で2回（前期・後期）、合計4回の選択（同一講座は選択できない）
3. 通常の教科授業では時間・人数の制約から充分にできない学習内容を教科の視点から、教師が学習計画を立案する。
4. 学外講師（大学、市民講師等）とのチーム・ティーチングを積極的に追求

### 学習の目標・期待される効果

1. 学習者の興味・関心の掘りおこしや課題追求の機会を与えることを目標とする。
2. 浅く、広い学習を通して、個を探り、また自立と共同の学びを目標とする。
3. 各教科を多面的に追求することにより、学習内容を深めたり、学習項目の関連に気づいたり、新たな観点から学ぶことができる。
4. 自己の個性を新たな観点から追求する機会が与えられることになり、自分の個性を探る経験ができる。
5. 選択により学習への動機付けが高まり、また自己決定の経験を増やすことができる。

## 高校新教科群の特色と内容

### 学習の特色

#### 新教科群9つの特色

- ①少人数学習による多様な活動
- ②生徒参加型授業
- ③選択による高い動機付けをともなう学習
- ④大学の教員などの外部講師による知的刺激
- ⑤社会問題などをリアルタイムで学習
- ⑥1つのテーマを多角的に見る視点と考える力の育成
- ⑦展開グループ間の知の共有
- ⑧T. Tによる多様な視点での教科指導
- ⑨「専門基礎学習期」に適した専門的な学習

### 講座例

- 1 年前期 自然と科学
- 1 年後期 心と身体の科学
- 2 年前期 国際コミュニケーション学
- 2 年後期 共生と平和の科学

### 講座展開例

- 1 高校1年生、2年生で半期ずつ受講し、2年間ですべての講座を履修。
- 2 週に1時間の授業。通年で1単位
- 3 1つの講座を3名の教官で担当。13年度は「自然と科学」を数学、理科、社会の教員で担当。「心と身体の科学」は名古屋大学保健体育センター教官および体育、英語、理科の教員で担当。それぞれの教科の視点とねらいを生かしつつ3つのグループの連携を考えて授業を設定。
- 4 「心と身体の科学」では、名古屋大学保健体育センター教官による半期継続的な共同授業を実施。名古屋大学医学部産婦人科医師による特別講義など、大学との連携による生徒の知的活動の活性化を図った。

### 学習の目的・期待される効果

- ①少人数学習により、実習、疑似体験、ロールプレイなどの多様な活動が可能となる。これらを経験することにより、学びの多様性を身につけるとともに、知識のみでなく体感することができる。学ぶことの楽しさを体感することにより、自らの教養を幅広く高めていこうとする意欲を掘り起こすことができる。また、これからの進路や生き方（キャリア）を探る助けともなる。
- ②3つのグループの中で自分の興味・関心のあるグループを選択できるため、生徒が主体的に取り組むことができる。意欲の高い生徒が集まることにより、深く専門的な学習が可能となる。
- ③名古屋大学教官などの外部教師による授業は、生徒のみならず、教員にとっても知的刺激となり、新たな視点や、最新の知識を学ぶ貴重な機会となる。また、他の授業では継続的に学習できない社会問題などリアルタイムで学ぶことができる。答えのない問題を共に考える活動を通して、知識を得るだけでなく自分で考えて判断する力をのばすことができる。
- ④1つの大きなテーマを3つのグループの視点から多角的に考えるとともに、グループ間の連携による知の共有を図ることにより、教科の領域にとらわれない広い視野を育てることができる。T. Tによる多様な視点もこの助けとなる。
- ⑤「専門基礎学習期」に適した、中学選択プロジェクトより深く専門的な学習が可能となり、高校3年生での「個性の伸長期」につながる力を育てることができる。

(第3種郵便物認可)

# 性の違いによる文化的・社会的な差

# 『シエンター』を教科に

131日(月曜日)

中 日 新 聞

性の違いによる文化的・社会的な差は何? 名古屋付属高校(名古屋市中種区)で、『シエンター』を教科の主要テーマとして扱う試みが行われた。家庭科や総合学習(てび)的に取り上げられることも多いが、系統立てた形で取り組む授業は、全国でもまれ。生徒たちは、自分たちの意識や日常生活にどうシエンターにどう向き合っ 受け止めているのかを伝えた。(生活部・坂口夏)

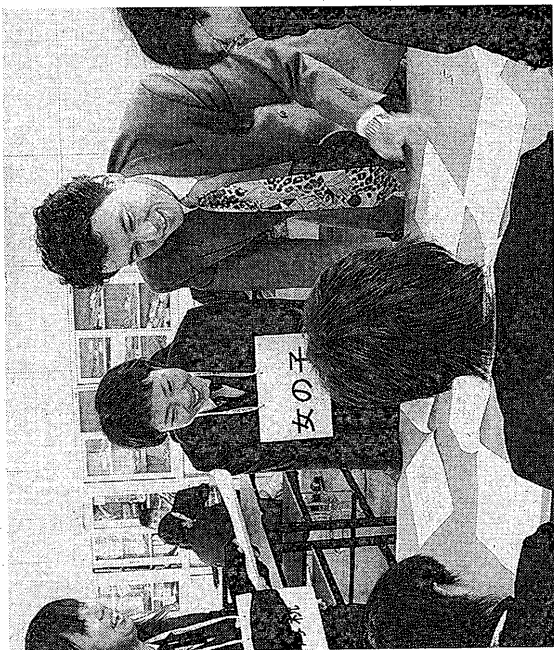
## 名古屋付属高校の取り組み紹介

### 劇で学ぶ

二年生への生徒が、アトリア劇を始めた。舞台はおボシア。夫の女の子は十一歳。父親がけがで働けなくなった上、大水害で畑は全滅。教育を受けていない母親に職はない。家を継ぐ弟は進学したいので、働きはかせない。そこへ現れた怪人。彼は、妻は人身売買のローカ。都会へ連れ出された女の子は、売春屋に日本入りに「買われる」。現地の経済状況などの下り々を基に、途上国ではよくある話を再現した。役作りを通じて、劇を見て、生徒たちは何を感じたのか。

買春(かいしゅん)する日本人役の男子生徒は「演じていて、男であることが悲しくなりました。父親役の男子生徒は「売春させるとは言うまでもないけど、一家が助かるのなら、娘を差し出すのも仕方ない」。少女役の女子は「他に仕事がない。本心は嫌でも、長女の責任でローカと一緒にいこう」。途上国では貧しいから「女性はお〇〇という状態に置かれている」と、空学部の方に言葉を書かされたシートに、劇を見た生徒たちは「立場が低い」「教育が受けられない」「捨てるのがやすい」「売春させられる」と回答。貧乏のしわ寄せを一身に受ける女

## 途上国の例を劇で再現



本格的に取り組んでみたかったと話す。狙いは、まず、シエンターそのものに絞ること。カリキュラムは、全国さまざまな美術館を巡り合わせを作った。例えば、理想の女性像、男性像を描いてみた。後、その特性が、生物学的な差なのだからを考へてみる。国語辞典から「女性」を引くと「雌を決す

## 性の境目に問いをかけた。生きやすい社会に

回校では「新教科書」という独自の科目もあり、既存の教科書では扱っていない独自のテーマを「クラスが三つのグループに分かれて多角的に追究する。シエンターを真正面から取り扱うのは、昨秋に始まった二年生の新教科「共生と平和の科学」のグループの一つ。指導する原順子教諭は「保健や家庭科の授業で性や家族を扱っても、時間や内容に制約がある。一度

## 平和や共生に 欠かせぬ視点

生徒にも意識改革めれば

る」などの語句を採り、シエンターの視点から意味を解釈してやる。

「授業は女まみり感がないでなく、男子にもっとも、特に一纏めに生きるというシエンターから解放されるはず」と原教諭。「ただし、シエンターは長い時間をかけて構築されたもので、『まぐさの懸け』というテーマは与えられていない。男も女も、それ以外の性を持つ人にも生きやすい社会をつくる方策を考へる場にして」

### 素直な感性

授業に決する生徒たちの反応はこうだった。「この一時間は、男女とも『まぐさ』と呼んでみる」と教師が提案しても、なかなか実行できない。男女の性別役割を話し合った時は、「男性は料理が下手」を生物学的な差と判定した生徒が、「シエンター板前は男性が多いよね」と教師の指摘を受けると、反論できなかった場面も。両親が共働きで生徒も多いが、母親のイメージには、専業主婦像が根深

貧困と女性の関係をテーマにした劇の打ち合わせをする生徒たち。名古屋付属高校で